

有名キャラ官能小説CG集第399弾!!



エロい娘は夜中襲いに来るんだヨ

Win
対応

Mac
対応

1GB
Memory

1024x768
Display

CD-ROM

CD-ROM

CD-R

成年向



妖怪は伝承上にしか存在しない。
なんだかんだ言っても、実在しないものだと思っている人間は多いだろう。
ではなぜ伝承にはあるにも関わらず、実在してはいないと思うのか？

「はあ、はあ、あううう、やめて…む、無理だよお、もう」
「ひひひ、マナ～…ワシはまだまだ、ヤれるんじやよお～、ひひひっ」
常識外の話ばかりだから？ 超常に過ぎて科学の世にあっては説明がつかないから？
そして、実際に妖怪を見た事も会ったこともないから？
だから妖怪など存在しないと考える…なるほど、それは道理である。

「お、お願いですから、娘にはこれ以上は…あっあっ！」
「ママさんはワシの相手じゃろうに。浮気はせんでえもらいたいのお、いひっ」
しかし、ならば伝承は？ 存在しないモノの伝承は一体どこから来たのだろうか？
火のない所に煙は立たぬ。
いや単なる誰かの作り話が、聞くに面白しとして伝えられただけと一笑にふせるだろうか？
「はあう！！ あ、あっ、ま、また……お、おっきいのが、入ってきたよおっ」
「んほあ～、何度やってもええ塩梅じゃあ～、年甲斐もなく腰が早うなってしまうわい♪」
その謎の答えの一つに向かって今、マナと彼女のママは鏡の中で老妖怪たちに犯されていた。

「はあっ、ん！ あっあっ、ふあああっ、だ…だめなのにいっ、あっあっ、やあああっ！！」

「ほっほほ、いい声が出るようになってえきたじゃないかマナ？」
ワシの珍宝はさぞ気に入ってくれたようじゃあのお♪
指摘され、マナの顔がカッと赤く染まる。
そんなエッチな子じゃないとブンブン顔を左右に振るが、染まった顔は冷却されない。
「ち、違うもん！ わ、私はそんなんじゃ…あっ、んんん～っ！！」
「ほおおれ、ここじゃろう？ マナが弱いのは？？」
こうクリクリと珍宝の先で刺激しただけで…ほれみい、スゴイ顔になったのお？
悔しいことに恐ろしいほど気持ち良かった。
年若いマナにはない知識と経験、それは絶大な武器となって抜群の成果を上げる。

「ま、マナ…っ。ああ、なんてことなの、はあ、はあ…こんな、事に…んはあっああんっ！！」
「娘の事を気にしとる場合じゃあないぞい、ママさんよ？」
ワシの珍宝も完全にママさんの良きところを捉えてあるでな、油断すると…あっ、という間じゃぞお？
イカしてやるぞ、いつでも———そんな妖怪の自信が、彼女の子宮を脅かす。
子を産んで久しい腹が、旦那ではない妖怪の珍宝の刺激に打ち震え、
再びの仕事の到来を予感してか、微かにその口を開けたり閉じたりしていた。

「いや、ダメ…ダメですそこはっ、はあはあ、主人の…あっああ、入って、きてはっ！！」
しかし老妖怪の珍宝は、彼女の子宮へとスズスズカと入り込んだ。
妖力に満ちた、禍々しいオーラをまとった肉棒の到来に、子宮全体が萎縮し、ますます締め付けてしまう。
「ほうりゃほりゃっ、ここか、ここか？ それともここがええんかのお？！」
しわくちゃな外身とは異なり、若者すら羨むほどの膨張を成し遂げた珍宝が、
子宮の中で暴れまわるのだから、いかに経産婦といえどもたまらない。
むしろ子を産んでいるからこそまだ受け入れられる犯され方とも言えた。

「はあんっ、あっあっはああ！ お、お願い…ですっ。
はあはあ、だ、出す時は抜いて…抜いて…んんっ！ そ、そこは…そこで出すのはっ」
しかも今日は危ない日だ。
こうしている間にも、漂っているであろう彼女の卵子は、
あるいは妖怪の珍宝に幾度も騎られているかもしれない。

「や～だわっ！ ここで出すのが肝心なんじゃぞお？ そりゃ、ワシの仔を孕めえいっ！！」
「い、いやあああ！！ あなた、あなたっ！！ ゴメンなさい、ゴメンなさいいっ！！！！」
ドククッ！！ ドククッ！！ ドクドクドクッ！！

中出し、それはこの一度で終わりではない。
2度、3度、……数百……数千……
やがて腹は膨らみ、涙も枯れて、そして……

—— オギャア、オギャア ——

「……ハッ！？ …あ、あら？ ……ぼーっとして私ったら…？？」
「…あ、れ？ ……ママ？？ えーと、あれ？ 何してたんだっけ…」
二人して、なぜかポンヤリとしてしまっていた事を不可思議に思いつつも、
母は台所へと首をひねりつつ移動してゆく。
娘は以前として突っ立ったままだ。

「……かが、み……。？？？ えーと、なんだっけ……」
自分しかうつっていない鏡の前で、
マナは何をしてたんだか、何をしようとしてたのかを思い出そうと考え込んだ。

—— 鏡の中の世界で、時は一瞬に過ぎ去り、そして彼女らは全てを覚えていない。
妖怪が、人の身近に潜むのに理由は様々である。
しかしもし、その中に繁殖を目的としている者がいたとしたら……？

マナも移動し、鏡に映らなくなった後、
子を抱いた老人達が、ほくそ笑みながら浮かび上がっているのを、誰も気付きはしない。
そして、彼らが次の機会を常に狙っている事もまた、誰も知らない。



河童たちの進撃は止まらず、鬼太郎たちの制止も失敗——その結果……

「あ、…あっ、あ…はあ、…んんん、や…ら、らめ…え、もう、もう…はいらな…いいい〜っ♪」

「フッフッフ、尻子玉を抜いた分、まだ入るはずだ。どんどん中出してやるぞ、猫娘」

河童たちは、社会における権利を獲得した。それも強権を、である。
なぜ人間は彼らを認め、そして受け入れたのか？
それは彼らのしたたかな戦略が功を奏したからであった。

「はあ、はあ…やあ…ひ、ひたろお…の、…はあはあ、らめに…い、はあはあ…とっておいらのにい…」

「わ、わらひの…アソコ、かっぱに種付けされへえ…はあはあ、もう…もう、らめらのお…っ♪」

河童たちは、まず人間たちの尻子玉を抜いた。
無気力になった彼らを捕らえ、しかし害する事はしなかった。
代わりとってはなんだが、彼らは捕らえた人間の代わりに仕事をした。
そして人間よりも成果を上げて見せたのだ。

「よーし、次はボクだ！ 覚悟しろー猫娘、必ずボクたちの子供を孕ませてやるからなー」

「ひ、ひにやあん…そ、そんらの…らめえ…、あっ！ あっあっ、あ〜〜っ♪♪」

さらに彼らは、捕らえた猫娘との交尾シーンをネットで無料公開した。
ただしそれは単なる裏サイトの一エロス動画ではなく、ある目的と呼びかけを行う広告動画であった。

—— 貴方のために、無気力・無抵抗な嫁、旦那をご紹介します ——

扇情的で性欲を催させる交尾映像、加えて猫娘にキャッチーな台詞を吐かせた。

『あんっ、あああんっ、どんなブサイクなアナタの精子も、抵抗なく受けとるわ…ふにやあああっ♪』

モテない男達の中から比較的度胸のある者が、すぐに喰いついた。

そんな人間たちに、尻子玉を抜いた人間の女性を斡旋。

一方的に既成事実を突らせて何の障害もなく結婚に至った。

そうした男達が報告をネットにあげれば、もう連鎖が始まる。

我も我もと、加速度的に希望者が殺到。

結果、高い未婚率と少子化に歯止めがかかったのである。

「はあ、はあ、ふにゆうう！！ ふ、ふかいのおっ…らめ、…そんら、深く…は、らめよおっ♪」

「キュウリのように長く立派なボクのチンポ、しっかりと全部受け止めるんだ！」

そして今、新たな広告動画を撮影中である。

種付け、そして猫娘が腹ボテになったところでまた撮影し、編集を入れて1本の動画にする。

通称、マタニティ編である。

最初の広告動画のおかげで猫娘の人気は高く、広告効果が大きかった事を受けての第二弾だ。

「はあ、あっあっ、ひ…うんんっ♪ そこはらめ…らめえへえっ♪」

長く、しかも美脚でスレンダー、さらに顔もとびきりの美少女と、元より人気の素地を持っていた彼女、

尻子玉が抜かれたせいもあって、反抗も一切なく、河童たちは完全に彼女を飼いならした、

そのマンコは河童たちのチンポを余すことなく覚えきって久しい。

「今日こそ孕むんだ、いいな猫娘？ 世界中の人間がお前の腹ボテ姿を待っているんだ！」

「そ、そんらのはずかひすぎへ…あっひっ、んん…ら、め…えふあっ、あふっ、んんんんうっ♪」

人間社会に大きく寄与した彼らだ。国は放っておかないし、人々は彼らの功績を称える。

結果として、彼らは人間社会における権利どころか、公権の及ばぬ一部特権をも認められた。

真っ当な労働条件を得るにとどまらず、河童たちは隆盛の時を迎えたのである。

「い、いぐううっ、いっちやうう！ ほ、ほんろはいやらのにっ、ま…まらイっちやううう〜っっ♪♪♪」

ドギョッドギョブブッ！！ ビュルッビュグブボブッ！！！！

中出して満たされる腹。その感触も一体何千回と味わっただろうか。

猫娘は河童たちのメスとなり、やがて新たな妖怪を産むことだろう。

果たしてそれが、河童の妖怪なのか猫の妖怪なのか、はたまたその混血かは、生れてくるまでわからない。

ただ一つ、河童たちによる種付けは、

彼女が子を成そうと成すまいと、一生続くであろうことだけは間違いないだろう。



「やーだー、離してよおっ！ 狸のお嫁さんだなんていやっ」
「嫁じゃあない、性奴隷だっ！ ナチュラルに自分の立場上げてんじゃねーよっ」
マナの四肢を掴む狸は、ある意味で彼女は狸っぽいと呆れる。
その両脚を大きく開脚させつつ、自慢の肉棒を生で挿ませる人間の女は、
既に狸の耳と尻尾を生やしつつあった。
「完全に狸にやあならなかったが…へっへっへ、これはこれで面白そうだな」
「お前、かわった趣味してんなあ、こんな半端ものに萌えるのか？」
「こ、こんな事されてるのに酷い言われようなんだけど…?!」
アソコは丸見え、胸もはだけさせられ、身体の恥ずかしいところは全部露出させられている。
人間の異性でないからなのか恥ずかしい事は恥ずかしいのだが、
まだムッとして言い返すだけの余裕が、彼女にはあった。
「へっ、もうすぐこの世は完全にオレたちタヌキのものになるんだ」
「そーそー、むしろ性奴隷になれる事を感謝しろよお？」
他の人間と違って、気持ち良〜く毎日お狸様に奉仕できるんだ、いい身分だろう？」
「っ、きっと鬼太郎さんがそんな事させないんだからっ！」
狸のチンポの先端がマナのマンコにキスをする。
それでも彼女は、今からナニをされるかを理解してもなお、気を強く維持せんと狸をにらむ。
「へっへっへえ、そいつあコワイねえー。んじゃ、コワイのが来る前に、がっつりハメ倒すとしますかねっ」
ズブグウッ!!!
「んぎいっ??! い、いだ…いだだだっ??! なにコレ、すっごく痛いっ??!」
破瓜のかつてないほどの痛みに、マナは目を見開き、ヨダレを一筋こぼしながら歯を噛み締める。
タヌキのチンポが深くハマらんと進んでくるたびに、
痛みがズキンズキンと股間部より放射されてくるのだからたまったものではない。
「長くながーくお世話になるんだ、しっかりとチンポの味を覚えろよお? おらっ」
「んいっ、いひっ、ぐっ、ふんうっ??! はーはー、こ、こんなの…あっあっ、ひど、い…いっ」
タヌキの出腹がマナの太ももからお尻にかけての辺りの柔肉でポヨンポヨンと跳ねる。
チンポの出入りが膣壁をズリズリとこすり、愛液伴わぬ内から容赦ないピストンで責めてくる。
「ははは、頑張れよー人間」
「こんくらいで参ってたらー、鬼太郎っつーのがどーこーする前にぶっ壊れちまうぜー？」
「さっさと慣れるよー? オレたちや“長い”んだからよー、簡単にへばってくれんなよな」
ゲラゲラと笑い飛ばす狸たちに、彼女はムッとして奥歯を噛み締める。
挑発に乗るのは良くないが、彼らに気持ちで負けたくないと意地を張ってしまった。
「こ…こんな事くらいでっ、私…はあはあ、へ、へこたれたりしないからっ!!!」
「そーそー、その意気その意気。そんならいの方がありがたいもんだ、そうらっ！」
タヌキはさらに腰を早める。
彼らがマナを性奴隷にするという言葉に偽りはないらしい。
まるで彼女の身を案じない卑しっぷりは、
壊れてしまえば別のをひっ捕らえてくればいいと言わんばかりの冷淡さを感じさせる。
「(っつ怖い、痛いし気持ち悪いし、…でも、耐えなくちゃ…鬼太郎さんがきっと助けにきてくれるからっ)」
幸い、タヌキのチンポはマナのマンコに対応できる範囲の大きさだ。
苦痛はあれど、致命的に傷をつけたりするレベルではない。
我慢すれば、耐え抜く事はできるはず———マナがそう思った矢先、その考えは打ち砕かれる事になる。
「お、おっ、きたきたあ、込み上げてきたあ！ さーあ、ぶっ壊れるんじゃあねーぞお人間？」
「うっ、あ…な、何?? え、え?? うそ、どんどんおつきくっ……ええ、ええええええ??!!!」

ドバンッ!!!
「おぶっ???!」
ドバボバボボボババババァッ!!!
「ひんうううう!!?? な、なにに、や、あ、あ、あ、お、おなかはあああああ!!??」
ドビドビドボバボボボボブブッ!!!
タヌキの玉袋が10倍…いや、100倍に膨れたかと思えば、どんどん萎んでいく。
その膨れ上がった中身は全て、マナの中にぶち込まれていた。
「ふひゅー、気分持ちえー。この瞬間が最高だーあ、たまんねーえ!」
タヌキの超絶種付けを受けて、マナは口を開いたまま、カハッと息を吐く。
しかも不思議な事に、軽く破裂してしまふレベルでザーメンを注がれた下腹部は、まるで膨らんでいなかった。
「へへへ、見た目にゃ耳と尻尾だけしか変化してないが…お前の性器はどーやらオレらに対応できるみてーだな」
「ってことはガキ孕めるのか? はは、こりゃあめでたい。性奴隷から孕み袋に昇格だ、よかったなーオイ？」
「ひひひ、こりゃ張り切って金玉膨らませねーとなあ。光栄に思えよ? オレたちの繁栄に一役買えるんだからよーお」
タヌキたちの言葉も半分は聞きながら、
マナはとにかく気持ちを折れさせないようにしようとして自分に言い聞かせる。
そして、願った。
「(…鬼太郎さん、早く……早く……助けて……)」
今はもう、タヌキたちの言う通り孕み袋に成り果てる前に、救い出される事を願い続けるより他なかった。



「はあ、はあ…う、あ…あ、あな…たあ…、へえ、え…べ…あ…は、あ…んう」

しかし彼女のマンコを貫いているのは旦那ではない、河童のチンポを挿入され、アへいでいる妻を助ける事もせず、社長もまた床に伏して無気力に喘いでいた。

「やあ…っ、私…そんらのはいんない、ああっ、あっ、あっ…や～あ～っ」

娘もまた、河童の手籠めになりつつあった。まだ母と違って嫌がってはいるものの、抵抗も拒絶も半端だ。河童に難なくチンポをぶち込まれて、大きく背を反らせながら悶えるのみ。

「ふっふっふ、最初からこうしていれば良かったのだ。」

「我ら河童は人間社会に進出し、そして地位と権力を手に入れた！」

元社長の家族を手籠めにする、それはまさに計画の集大成であり、完遂の最後の行程である。すなわち、社長の全てを河童たちが乗っ取った証明であった。

「協力感謝するぞ猫娘よ。お前もこれから可愛がってやるからな、我が妻としてっ」

「はあ、はあ…あっ、へ…ら、そんらの…はあ、はあ…ら、め…らのに…ああっ、き、きもひよふっへえ…♪」

もちろん彼女自身は協力などした覚えはない。しかし、尻子玉を抜かれて気力をもかれた彼女は、河童たちを諷めんとする鬼太郎達に対する、いい餌であった。勧誘、誘引、隙作り——結果、河童たちは敵対者の尻子玉を難なく抜き取り、全て無力化した。そこからは怒涛の快進撃だ。会社を乗っ取り、元社長の頃とは比べ物にならないほど大きくなった。そして社長の妻と娘の凋落もほぼ完了……人間社会における河童組織の旗揚げは、ここに完了した。

「んあっ…あっ、はあはあ…こ、の…あろ…はっ、はあはあ、ど、どーする…気…はああふっんん！！」

「まずはその人間二人に、河童と人間のハーフを産んでもらう。猫娘、お前もだ」

河童たちの次なる狙いは、組織の拡大と人間社会に広く根付かせる事である。しかし彼らは熱いあれど、人の社会を侮ってはいない。このまま河童組織の存在を明るみにする事は、拙速に過ぎると自覚していた。

「あんっ、にやあ…っや、あ…か、河童の子供らんで…はあはあ、う、産みやない…わ、よ…あっあっ♪」

「フッフッフ、猫娘はまあゆっくりでいいさ。だがそっちの二人には、5人…いや最低10人は産んでもらう。」

我ら河童と人間の架け橋となり、徐々に人間たちに河童の存在を抵抗なく知らしめるためにっ。時間をかけ、河童と人間の愛の子を社会に浸透させてゆく。彼らが善行をもって人々に認知されていけば、やがて河童という存在に対する抵抗も薄れさせる事ができる。それは長い時間がかかるだろう。だが妖怪である河童は寿命短き人間のように焦る必要はない。

「…いや、やはり猫娘、お前にもたっぷりと我らの子を産んでもらおう。妖怪の混血は戦力になりそうだからな！」

「い、いにやああ…はあはあ、やあ…なのにい、はーはー、こ…腰い、とめらんない…っ♪♪」

かろうじて自我を保っていても、もはやその表情は終始みっともないアへ顔を晒してしまっている。

尻子玉を抜かれ、無気力なところへの陵辱による快楽漬けは、苗床と化して至福を感じる心身へと変えるに容易かった。河童たちは自分達の力の有効活用を学んでしまったのだ。

「はっはっはー、もっと人間の女を苗床にし、計画を加速させるのも良いなっ！」

「ら、らめえ…そ、そんらことぞ、ぜったい…らめなからあっ…あんっ、あん、にやあんっ！」

「ならば頑張って産んでくれれば良い。そうすれば女を増やす必要はなくなるのだからねっ」

河童のチンポは思いつきり猫娘の膣をえくり込む。子宮がグンッと押し上げられ、下腹部の表に亀頭の膨らみが浮かび上がった。

「ふみやあああ、らめええ、ふ、ふかすぎりゅうううう、あっあっ、あ———っ♪♪♪」

ドビュビュルッ！！ ドグッドウツグンッ！ ブブビュドビュドビュウ！！

中出し自体はもう何十回目とも知れない。だが本気の孕ませ射精は、意欲も力の入り具合も段違いだ。それを受けて、猫娘の両目はグリンと上に回転しそうになる。かろうじて白目をむくのをとどまっても、全身が痙攣して完璧にイキきってしまい、声も発せられない。

「ふっふっふ、我ら河童の大いなる計画、その第二章がここから始まるのだ～！」

ワッと盛り上がる河童たち、彼らの隆盛の頂点はまだ遙か先にあった。



「はあ、はあ、はあ…ね、ねこ姉さんこれって…っ、んっあ…(はううう！)」

「怖がっちゃダメよっ、んうっ…こいつらは、はあはあ…んっんう！」

「私と同じ、怪談の…んっ、はあふっ、妖怪…なの…っ」

マナは、頭の中が軽くパニックになっていた。
いきなり、そう、いきなりだったのだ。
なんてことなく夜の学校を猫娘と、協力者の花子さんらと共に歩いていた。
不穏な噂の調査をするためだが、そう——“歩いていた”のだ。
ところが一瞬、気づけば一瞬で3人そろって恥部を露出させられ、
アソコには深々とチンポが挿入っていた。周りには様々な妖怪がむしめいている。
「(どうなってるの?? まるで時間が飛んじゃったみたい)」
仮に、妖怪たちにもものすごく早く襲われ、ものすごく早く犯されたと仮定しても、
まふたを閉じて、開いたら全てが一変していた、なんてことはない。
現在に至るまでの過程というものがあるはずだ。
ところがそれがスポンッと抜け落ちて、
0.1秒でまるっきり状況が変わってしまっているなど信じられない。

「ふっ、はっ、…んんっ！ 枕返し……っあいつだわ、学校の怪談連中に手をかしてたなんてねっ」

「ま、枕返し……ってあの!? ど、どうしてっ、…あつあつ、んんう！」

不思議な事に、処女であるはずが痛くない。
それが、皮肉にもこの現実が現実でない事をマナに理解させた。

「前に利用した事、根に持ったの悪戯ってどこかしらねっ!? んっ、う…はあはあ、うくっ…う」

どこかで見てるであろう枕返しに対して叫ぶも、猫娘の語気は途端に弱っていく。
その理由を聞くまでもなく、マナは身をもって理解していた。
「(こんな…こんな気持ちいいんじゃ、いくらねこ姉さんでも力入らないよね)」

それは男も女も、等しくその心身を墮落させる最高の感覚。
見れば花子さんも困ったような表情の中に、嬉しそうな感情を押し殺しきれないといったものを含めていた。

「ああんっ…や、やめてえっ…はあはあ、こ、こんなのどうしたらいいか、困っちゃうの～おっ」

それが花子さんの精一杯の抵抗だった。
気持ち良すぎて止めたくないという意識が強く、
しかし抗わないと、止めさせないという意志がかるうじて残っている感じだった。

「はあ、はあ…ゆ、夢なら…はあはあ、ま、まだ…大丈夫…なんですよね、ねこ姉さん??」

経験したことのない、これが男性器を挿入られてのセックスというものを、
夢でなら、むしろデメリットなしに体験できるなら別にいいかとすら、マナも思い始めてくる。
だがそれは、精神がトロけさせられている事を意味していた。

「んあっ！ はーはー、だ、大丈夫じゃないわっ、はあはあ…気をしっかりもたないと、の…飲まれ——んんん！！」

猫娘が猛烈に痙攣する。
派手に絶頂ってしまったのだ、本人の抑制がまるでできない。
絶頂ったというより絶頂かされたという方が正しかった。

「はあー、はあー、はあー…き、気を付けてマナ、気をしっかり持つのよっ」

だが、既に遅い。
マナの全身は初体験のオーガズムと、
恋愛という過程を飛ばしての繁殖行為という、猛烈な性本能に直撃した快感が彼女の頭を突き抜けた。

「はああああううう!!? な、なにこれええええ———???! ま、まっしろに…な、っちゃうううっ♪♪」

ビグビグッ、ビュルルルッ!! ドクンドクンドクンッ!!!

夢とは思えないほどのリアルな、下腹部の内壁を打つ妖怪ザーメン。
生を受けて今まで感じてきた、全ての快感と幸福感をぶちぎりで置き去りにするほどの気持ち良さ。
それらは容易く、人間であるマナの価値観の塗りかえと、性欲への覚醒を促してしまった。

「どうしてくれんの！ マナがすっかりハマっちゃったじゃないの!!」

猫娘の前で正座をしているのは、枕返しと学校怪談の妖怪たち。
説教をしてもどうにもなるものでもないが、元凶をしっかりとつけないと気が済まなかった。
あの後、夢での体験を忘れられなかったマナは、すっかり色に目覚めてしまった。
人間の男子のみならず、妖怪までかどわかすほどの色情魔に変貌し、
今もどこかで誰かとやっているに違いない。
もっとも猫娘はマナの心配、というよりも性に解法的で節操のなくなった彼女が、
鬼太郎に手を出す事を恐れているだけであった。



都合のいい、望みの夢とは、まさに理想であり、その者にとっての最上の幸せである。
それが現実でなかったとしても一時、体験できるとすれば利用しようとするのは当然だろう。

「はあ、はあ、はあ…ちょ、ちょっとお、なんで鬼太郎がマナの方なのよおっ?!」

「ね、ねこ姉さん落ち着いて…ァんっ、そんな中で……はあはあ、き、鬼太郎さんのエッチ…い♪」

同時に二人が同じ夢を…しかも願望がバッティングしたならば、
当然の如くどちらかがその理想からスレる事になる。
猫娘の願望はマナの方に反映されたようで、今彼女自身のマンコを貫いているのは別の妖怪だった。

「はあ、はあ…くうう! は、はんっ、どうせこれは夢、そう現実じゃないんだからっ、別に悔しくなんて——」

「あぁっあっ、んんんっ、す、すごい鬼太郎さんっ、あぁん♪ はーはーあ、すっごく気持ち良いよお♪」

物事は、常に表裏一体となって同席しているもの、
ある一つの事柄に対し、
同じ人間がYESという意見を抱いたとしても、NOを抱いている側面も同時に存在しているもの、
二人の理想を顕現させた夢は、二人が理想としないものもまた同時に顕現させる、
それが鬼太郎以外の妖怪たちによる、乱暴な乱交レイプというこのシチュエーションに現れていた。

「きいっ、なんなのよもうっ、ふ、ふんだっ! わ、私だって、私だって…ううっ、うっんん!」

悔しさから涙すら溢れそうになる、これは夢、そう夢なんだからと言い聞かせてもやっぱり悔しい、
現実じゃ、とてつかないそうこない理想を夢見たいのに、と猫娘は嘆く、
そんな彼女に妖怪たちは容赦なくその肉棒をぶち込んでくるのだ。

「はあ、はあ…うう! この、くのっ、このっ、はんっ、どうよっ、どうなのよお私のおマンコはっ?!」

「ね、ねこ姉さん、そんなヤケにならないで…あっ、ふあっ、んん! はあはあ、い、一反門目さん、く、くるしいよ」
二人の身を束縛している一反門目は、その顔面をマナの乳房に擦り付けながらうっとりとして話を聞かない。

「やんっ、あっ、はあっ、はあっ、んんん! そ、そんなに…んっああ、そ、そこを擦られちゃうと私っ」

マナの乳首がとんとんせり上がっていく、
それが一反門目の顔の布をおして、布の白色がとんとん赤らんでいった。

「もおおおお、このスケベどもっ! 私は、私はっ、鬼太郎だけでいいんだからっ、うにやにやにやにやあっ!!」

完全にブチ切れた猫娘が、妖怪の差し出すチンポを鷲掴みにしたかと思うと、
これでもかと超速手コキをお見舞いする、
同時に腰もまたスピーディーかつ艶めかしくうごめかせて、妖怪のチンポを意識的に搾り出しはじめた。

「ね、ねこ姉さん?!」

「はあ、はあ、はあっ、こんな、こんな夢なんてええっ! こうしてやる、こうしてやるわっ、んっんっ、はあっ、んんうっ!」

陰が肉棒を搾り、リアルな感触を猫娘に返してくる、
これが、これが鬼太郎だったら、鬼太郎と現実でだったらどれだけ幸せだろうかと、悔しい気持ちで自らを突き動かす。

「あぁっ、ううう! はっあ、ふあぁっ、くめっ、くのっ! んにやあっ、んにゆうううっ、ふぎいっ!!」

ビュロルルルッ!! ドクドクドクッ! ドクンッビュグググッ!!!

中出しされても、なんの心配もいらない、だってこれは夢だから、
ある意味、一切の遠慮なく楽しめるという点では、現実よりも優れていると言えるだろう、
だがそれでも、それでも理想を現実にしたという感情が勝る。

「——おう、どうだったお二人さん。いい夢あ、見れたかい」

目覚めると、枕返しが出迎えた、
新しい商売として、本人の見たい夢を見せるというアイデア、
それを猫娘とマナに試してもらったが、猫娘の方は表情が薄暗く、マナは逆に明るい。

「すっごく良かったよ! 私はもう一回してみたいな—って思った!」

「……私はもういいわ…なんだか虚しくなったから……はあ」

まるで正反対の意見に、枕返しはいけるのかいけないのか判断に困る、
結局、商売には至らなかったものの、
マナは気に入ったらしく、たびたび訪れては見たい夢を見せてもらうようになった。



「どうじゃ、いい加減本当の事を白状せい、ずんべらよ」

しかし、目玉の親父の問い詰めにも彼女は答える言葉はなかった。

「無駄ですぜ、目玉のおやっさんよ。そんな事よりもう少しばかり、俺らに楽しませて下さいよ」

そういって中年くさい妖怪が、腰を思いっきり前後させた。

「んふあっ…はぁ、はぁ、随分と…深くまで、可愛がってくれるじゃないかい…はぁ、はぁ…はぁ」

ずんべらのアソコに、スッパリとハマっている色の悪い肉棒。

四肢をはじめとして全身のあちこちを束縛されたまま、彼女は犯されていた。

それは陵辱ではなく、尋問だ。

さすがに息子の鬼太郎に、この仕儀を手伝わせるのは無理と判断した目玉の親父が、

知り合いの妖怪たちに協力を仰ぎ、その見返りとしてずんべらの身体を堪能する事を許し、

尋問と合わせたのだ。

「そこまで頑なに喋らんのはなぜじゃ？ よもや大きな企みを隠しておるのではあるまいな？」

「はぁ、はぁ…はぁ、はぁ、前も…言ったはずだよ。私は美に狂う女たちが愛おしい、ってね…んはぁあっ！」

深いところをグリグリとえぐる肉棒に、たまたず艶声を発する。

それだけでスケベな妖怪たちは興奮し、その股間を滾らせた。

「それはもう十分に聞き飽きたわい。建前を問いただしておるわけじゃあないのじゃぞ」

「はぁ、はぁ…んっんっあ…っ、建前じゃないわ…はぁはぁ、それが本音さ、まごうことなくね」

赤い紐が食い込み、大きな乳房の肉を限界まで搾り出した乳果肉を、

競うように妖怪たちの手が揉み掴む。

色の悪い巨根を口にねじ込まれ、奉仕を強要されてはその棒を手コキし、

マンコの深いところを突かれるたびに軽くイって、足先を小さく痙攣させる。

ずんべらにはまるで捲えていないようだった。

「ふっむ、これも口がかたいとはいう。

かといって、こやつらに協力してもらうためにもやり方を変えるわけにもいかんし、困ったのう」

彼女を犯す事が見返りである以上、それを止めるわけにはいかない。

目玉の親父が困っていると、ずんべらはクスと口元を微笑ませた。

「…ウフフ、一人加われずにつまらないでしょう。よければ入ってみたりしないかい、私の中に？」

目玉の親父の大きさなら、確かにずんべらの膣や子宮にまで直接潜り込むなんてプレイもできるだろう。

想像したのか、一部の妖怪が鼻血を吹く。

「そのような手には乗らぬぞずんべらよ」

「あら、残念なこと。あなたなら、直接私を孕ませる事も余裕で出来たでしょうに…んっ、あ…フフッ、欲のない人」

子宮まで行き、ずんべらの卵子に直で射精し、受精卵へと変える。それを運んで着床も余裕だろう。

目玉の親父ならそれくらいできそうだと、やはり他の妖怪たちが想像し、悶えた。

「へへ、無駄ですぜ、目玉のおやっさん。こいつ、口割りませて。だからとりあえず一発、ぶち込んでやいますよ？」

「むむ…しょうがないのう。ハメを外し過ぎるでないぞ」

尋問は続くのだからという事なのだろう。だが、妖怪は思いっきり腰を突き出す――

ズビュルズビュビュググウッ！！

「んはぁっ、…あぁっ、すごいね…躊躇もなく、中に…」

深いところに出すなんてさ、はぁはぁ、恐れ知らずもいいとこだ…あぁっ」

美とは、究極的にいえば異性を魅了する武器である。

つまり到達すべきところとは、異性をかどわかす事に他ならない。

妖怪になる前のずんべらは、伝承にすら手を出し、猛毒の水銀を服用するほどの追求者であった。

死後、妖怪化してもそれは変わらない。

彼女にとって異性に犯されるこの状態は、いわば追求した美の結果である。

そして……

「はぁ、はぁ、はぁ…ずんべらっ、うおぉお！」

「んっ、んんっ、いつでもやらせたげるよ…だから、んはぁっ、んっ、わかってるね…？」

目玉の親父の尋問が終えても、ひそかに協力者であった妖怪たちを引き込む武器となる。

企みがゆっくりと、堅実に進んでいく…その実感が

自分の美の追求が間違っていなかったという、優越感と達成感をもって、ずんべらに幸福を感じさせていた。

だから彼女は、迷いなく脚を開く、男根に股を貫くを許すのだ、ありえないほど容易く。



「はあ、はあ、はあ…愛してるよ、花子。俺は、オレは学んだんだ、本当の愛ってやつを！」

「わ、私は愛してなんかいないのにっ、はあはあ、な、何もわかってないっ！」

ストーカーを通りこして、ついに襲い掛かってきたヨースケ。怒らしめられて少しは反省したかと思えば、まるで反省の色なし。それどころか、ますます悪い方向にこじらせていた。

「はあうっ、あっあうん！ …そ、それにこの人間たちは？？ なんて、こんな事させて…っ」

一番不可思議なのが、なぜかヨースケは花子の元に人間の男を連れてきた。そして自分ではなく、彼らに花子を犯させているという謎である。

「言っただろう？ 俺は学んだんだ、彼らから愛のなんたるかを。彼らは僕らの愛を深める手助けをしてくれるんだよっ！ 素晴らしい人間たちだろう？！」

言いながら、彼女の乳首をこねくり回すヨースケ。

「んうっ！！ …ぜ、全然…意味わからないよ…はあ、はあ、はあっ」

思わずへんな声が出てしまうが、別にヨースケに乳首をいじられたからではない。既にアソコにぶっついチンポを突き刺されてより十数分。感じるのをなんとか我慢していたところに、チョンッと積み上げられたちょっとした快楽で、我慢のラインを越えただけの事ではない。つまり、花子に快感の喘ぎ声を発せさせたのは男達の功績が大半を占めるのだが…

「意地を張らなくていいんだよ花子。俺に乳首をいじられて、気持ち良くなってるじゃないかあっ！」

ヨースケは、自分の愛撫が彼女に快感を与えたと信じて疑わない。勘違い男の暴走は、何も改善されてはいなかった。

「ち、違っよっ、私…あっあっ、んんん！ あ、あなたに感じてなんか…いい、いないもんっ…んう！」

花子さんの体格に対して、男のチンポが大きすぎる。それが出入りするのによりやく慣れてきたマンコが、彼女の中で生まれる快感の大部分を占めていた。

「ほーらー、また意地を張る。ダメだよ花子、もっと自分に素直にならなくちゃっ、これがいいんだろう？」

調子によって、彼女の乳頭をこれでもかとこねくり回すヨースケ。むしろ乳首を摘まんで捻ったりする愛撫は一定の苦痛を発生して、花子さんがチンポの快感に酔いしれてしまうのを邪魔していた。

「はあ、はあ、も、もういい加減にしてよおっ、はあああ…わ、私あなたの事なんか…んっ、ん〜っ！！」

男のチンポが深いところの、望ましい部分を探り当てた。彼女の反応から、そこが感じやすい部分出る事を確信し、男はニタリとして自信を持ってその部分を攻める。

「あっあっ、あっ、あっ、だ、ダメええっ、そこは…そこはダメえっ！ はあはあっ、ああああっ」

「ああ嬉しいよ花子。俺の指でこんなに感じてくれてるんだね。」

「はあはあ、僕も君の声を聞いてなんだか興奮してきたよっ」

ますます強く、乳首をつまむヨースケ。それが愛撫の域を超え、痛みしか感じさせない力加減である事にも気づかずに夢中になる。

「はあっ、はあっ、あううん！！ はあはあ、ち…がう、っ、あっあっ、これは…これ、は…」

だが、増したはずの乳頭の痛みが徐々に気にならなくなり始める。痛みが快感に変わった——わけではない。

マンコを猛烈に攻めているチンポがもたらしてくれる快感が、胸の痛みなど忘れさせるほどに高まっているのだ。

「(な、何これ？？ こ、こんな感覚、はじ…めてっ、すこ…すこく気持ちいいのっ)」

外見はまだ少し幼めとはいえ、長きに渡り著名な妖怪である花子さんである。

男と女の情事くらい、知識として理解している。

だが、トイレの妖怪にチンポをぶち込む相手などいるはずもなく、経験はなかった。そのために、男の自分を内から破壊させてしまおうなほどのチンポに犯される快感は、新鮮かつ爆発的なインパクトでもって、花子さんの中に刻まれる——

「はああああっ、んん！ こ、これ…いい、イクって…いう、はあはあ、ダメ、私…、い…イっちゃうのお——っ！！」

ビュルルルッ！！ ドクドクドクウッ！ ドクンッビュグググッ！！

「とびきり元気がないと聞いて、見に来てみれば…失恋とはもう」

呆れるようにしみじみと言う目玉の親父。

だがヨースケは、そんな生易しい話じゃないとばかりに、激昂する。

「違っ！ 失恋じゃあない、俺は…俺は花子を寝取られたんだっ、人間の男にっ！！！」

あれ以来、花子さんはすっかりセックス好きになってしまった。花子さんのトイレに行けば誰でもやれるという噂を、花子さんのセフレ第一号に撒いてもらい、夜、毎日誰かしら人間の男が、彼女の個室にやってくるようになった。

「あんっ、あっ、あっ、あああっ！ いい、いいよおっ、もっと…もっと犯してっ、奥までいっぱいきてっ！」

妖怪といえど元は幽霊な花子さんだ。

遊ばせなくても必要なく、言っただけで半永久的に生中セックスを楽しめる。

自分の長所に気付いた彼女は転向に成功する。

どちらかといえばネカティブな怪談の主であったはずが、

こと男子に限るが、素晴らしい怪談の主となった。

彼女の個室から今や聞こえるのは、泣き声も恨めしい声からかわって、

悦びに満ちた喘ぎ声と、激しい交わりの淫音であった。



それは、鬼太郎と交流があり、なおかつ実際に妖怪を見てきた彼女だからこそ、察するに至れるが、普通は年若い男子達の行き過ぎた暴走としか思えないだろう。

「んぶっ、んっ、んっ、んうっ！ ふーふー、んんううっ」

チンポを無理矢理咥えさせられ、両手にチンポを掴まされ、マンコにチンポをハメられて…それでもマナは、彼らに抵抗する事は出来ない。

弟や友人達は性衝動に駆られて若気の至りたる過ちを犯しているのではないからだ。

『クククク、人間とは不便よな…無力がゆえにこのような目に遭おうとも抗えぬのだから』

「ふぶうううっ、んーんーっ、うううーっ！！」

明らかに、本人ではない声。

彼らに取りつかれているのは間違いなく、

マナが抵抗できないのは彼らが事実上、人質であるからだ。

『どうした？ アンコの締めりが悪いではないか、緩んでいてよいのか、んん？』

すると、弟の肌の表から一か所、ピッと何かが飛ぶ。それは表皮の極々一部、そしてその跡からは爪楊枝の先ほどの小さな赤が、徐々に大きくなっていった。

！！んんっ、んーっ…っ、ふーふー、んむむぐっ、んんぐっ！！

仕方なく、マナは下腹部に力を込めた。

言いなりになるしかないのが悔しいが、

妖怪は容易く弟たちを殺害できてしまう事を理解させられては従わないわけにはいかない。

「(うう、どうにかして異変を…知らせなくちゃ…このままじゃっ)」

幸い、処女を失った心身の苦痛からは脱却できつつある。

慣れたと言いたくはないが、チンポが陰を歩き来する動きもスムーズになってきた。

口と鼻を満たすイカ臭さも当初よりは気にならない。

犯される中において、マナに余裕が芽生えつつある——だからといって出来る事は、ない。

『それにしてもなかなかいいものだ、人間のカラダで人間を犯すというのも。気に入ったぞ、フッフッフ』

チンポの動くスピードが倍くらいに上がる。

マナの深いところを突き上げ、子宮がピリッと痺れるような感覚を発生した。

「んっふあああ？！ な、に…ひ、まの…おっ、あっあっ、んぶっ！！」

『こらこら、口をはなすな。せっかくノってきておところに水をさすでないぞ』

彼らは全員、一つの妖怪に乗っ取られ、感覚全てを支配されている。

彼らの肉棒が得る快感は集約されて感じられるのだ。

マンコの気持ち良さにフェラや手コキの快感が全て上乗せされ、

普通のセックスでは到底味わえない大きさの快感を妖怪は楽しんでいる。

だからこそ上機嫌、だからこそ油断している、なのに…

「(ううっ、なのに…っ、私じゃ何もできないよっ)」

ただただ犯されるのみ。

マンコがチンポに蹂躪され尽くしても、

口がその味を覚えきっても、

手が最適なしこき方をマスターしても…

無力なマナに出来る事は、ただ、彼らに犯され続けるだけ。

『さあてまずは1発、いくとするぞお。いや合わせて3~4発か、グハハハハ』

「ふぶっ？！ んーんーんーっ！！ んんうううーっ！！！！」

射精。

陰に感じるチンポが、手の平と指で感じるチンポが、口で感じるチンポが、それぞれ膨らむ。

彼女は目を見開いて、

しかしどうしようもないと諦めるように涙を軽く浮かべながら、悟ったような瞳の色を浮かべた。

ビュゴッ！！ ビュービュビュウッ！！

「(うううっ、髪に何かかかった…)」

ドビュルルルッ！！ ビュクンッビュルルッ！！

「(あう、手がぬるぬる…気持ち悪いよお)」

ドグッドグッドグウッ！！ ビュブッブグググブッブッ！！

「(お腹が熱い…ああ、射精されている…私中に、中に出されちゃってるよお…)」

それから、実に半月以上、

最近彼女と連絡が取れない事に不信を抱いた猫娘により、ようやく事態は露見し、マナは救い出される。

しかし退治された妖怪は、彼らに副作用を残していた。

「はあ、はあ、もっと、もっとしたいよ！」

「あんっあっ、やっ、だ、だめ…っ、今日は、はあはあ、これで終わりだからねっ？！」

異常なまでの発情。

そして、すっかり色情に慣れてしまったマナは、そんな彼らの性欲を慰めるハメになっていた。

しかし事はそれだけでは収まらない。

妖怪は、彼らの精巣に自分の妖気を宿しておいた事を…

そしてそれによって、マナから肉体を経て生まれ出でる事を画策していた事を、

彼らと彼女は知るよしもなく、妖怪の復活に寄与する行為をやり続けた。



「はあ、ふう、はあ…ちょっと、それ本気?? …そんなの入るわけじゃない、バカじゃないの?」

猫娘は、心底バカを見るような目でねずみ男を見上げる。
いつもの恰好にハンディカメラを片手に持って、
猫娘のマンコに向かって自分の肉棒をねじ込もうとしていた。

「なにおう! このオレさまのチンポを喰え込めるだけでもありがたいと思えよ、ひっひ」

「…はあ、しょうがないわねー、さっさと挿入れなさいよ、まったく」

「(しめしめ…猫娘の奴、これっほっちも疑ってねーでやんの、洗脳は完璧ってこったな、うししっ)」
普通なら、こんな事を許すような女ではない。普通なら他の男達も含めて切り刻まれてるだろう。
だが猫娘は両手にチンポを握り、アナルにぶち込まれ、
男をベッドに寝転がり、大腿を開いて挿入を待つという自分の状況に砂粒ほどの疑いも抱いていなかった。

「へへ、いくぜえ、オレさまの超ド級デカチンポ…ぶっ壊れるんじゃねーぞー、うりゃ!!!」

ズブズムズグズムッ……

「んくふうっ?! …ちょっと、無駄にデカすぎ…でしょ、かっは…はあ、はあ…んくうっ!」

「(くうー、いい表情だぜ、へへ、
必死にこらえても涙が浮かんでやがる、気の強え女はこれだからたまらんなあおい)」
ねずみ男のチンポは、本来もっと矮小なモノだった。
しかし猫娘を洗脳“してもらった”際に、自分のナニもパワーアップさせてもらったのだ。
自信みなぎるデカチンポは、ちょっとやり過ぎたかもしれないと懐いてしまうほど。
こうして人間の男の、比較的デカイと思われるモノと比べてみても、太さも長さも2倍は余裕である。

「ぐひっ!? はあーはあーっ、それ…そこで限界っ…はあはあ、無茶苦茶よ、こんなの…んぐっ、くっ!」

「なんだあ、まだ半分も入ってねーぜー? 大丈夫大丈夫、もっと入るって、そうらよっど!」

「ちよっ、…む、無理だって言って——うにやにやはあああああっ?!」

グゴリッ!!
少し嫌な音と感触がしたが、ねずみ男は腰を引かない。
むしろ今までのお返しとばかりに邪悪な笑みを浮かべ、さらに腰を突き出して肉棒を押し沈める。

「はあ、あっ、んんんううう!!!! このバカあ、はあはあっ、こ、こんらの…くふっ、い…いきも…れきな…っ」

「へへへ、入った入った、な? やればできんだろお? そうら、ガンガンかき回してやるぜえっ」

速慮なし、一切の速慮なし。
ねずみ男は調子に乗り始め、猫娘の下腹部内を蹂躞する。
デカくなり過ぎたせいなのか、感じる快感も心なしか強くなっている気さえて、どんどん激しく腰を動かしてゆく。

「やああっ、ばか、はかっ…こわれ、こわりゆからはあっ、はーはーっ、んんいいいい!!!」

「ぬほおうっ?! そんな締め付けんって、出る出ちまうからよっ…くうう、も、もうちょっと楽しませろっての!」

ただでさえアナルにもぶち込まれている二穴ファック。
これ以上無茶をすればどうなるかなど素人でもわかる。だがねずみ男は自分のやりたいようにやるばかりだ。

「おら、おらっ、どうだっ、まいったかこのねずみ男さまのチンポにひれ伏しな、ウヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!!」

「ひぐっ…この、…はあはあ、こんなの、苦しい痛い…だけ、って…はーはー、わからないとかっ…」

「ちいっ、さすがに我慢も限界か…出すぜ、お前の中によっ、そうりゃあ♪♪」

ドボドボドボッ! ポポッドクウ! ドブドブドブ!

量は多いが勢いにかける射精。
猫娘の子宮を満たしはするものの、緩い奔流は刺激に欠ける。
だがねずみ男は自信に溢れていた。これで猫娘はオレさまの虜だと言わんばかりに…しかし

「あー、ねずみ男さん。
アンタだめだわ、せっかくの美人さんを壊しまいかねないし、勝手に進めるしで邪魔だよ」

「へ?」

「はあ、はあ、はあ…ねずみ男、アンタ…後でギッタギタにしてやるんだから、覚えてなさいよ…ぜえ、ぜえ、ぜえ…」

「お、おいおい、ちょっと…どういう…ぶわっぶ!! ちょっと待って、あれ? おおおい!!!」

男達によって叩き出される。
それは、猫娘を洗脳した妖怪の意志だった。
彼は真に優れたAVを取る事を追求し、そのためにねずみ男のイチモツも肥大化させた。
しかし役者として下劣不快と判断し、彼を排除し、そしてそのイチモツも元の…否、元以下まで矮小化させた。
そんな惨めなねずみ男を差し置き、相手役をかえて撮影が再開する。

「ああん! はあ、はあ…いいわあ、ぜんぜんこっちのがマシ。大ききばっかじゃないわよね、やっぱり…にやはあんんっ♪」

猫娘の悦びに満ちた喘ぎ声上がる。
ハードな乱交セックスにも先ほどとは違って変わって難なく対応し、やがては自分から腰を振るいはじめる。
その態度の違いは、ねずみ男のダメさ加減を一層際立たせ、男としての彼を容赦なく打ちのめした。





















